

カフェ・ラビュリフトゥス

帝都歴異妖者奇譚 其ノ三



濫觴らんしょうは須臾しゆゆの邂逅かいこう



この世界には人間以外のものが存在する。

例えば、日本の帝都。

長く時を経た食器や雑貨が魂を持ち、妖怪へと変化して、そのまま蔵に住み着いたり。

二十年を超えて生きた猫の尾が割れ、行灯の油をぺろりぺろりと舐めたり。

柳の傍らに、ぼんやりと立つ影の薄い幽霊がいたり。

極稀に、羽目を外した彼らの大集合である百鬼夜行が空を横切ったり。

それらすべて、まとめて異妖者^{こともの}と呼ばれている。

そして、帝都だけでなく世界中に存在する。数多に――



カフェ・ラビュントウス

帝都歴異妖者奇譚 其ノ三



序之零・苦死

『櫛』は『苦死』にかかり、拾う、贈るは不吉とされている――

その為、櫛屋の屋号も、九に足す四の十三屋。

だが、そう言われながらも、男が添いを遂げたい女にだけ贈るものでもあった。

序之一・黒鼈甲ノ櫛ト千代

一八六四年七月。

江戸の街を焼く真っ白な太陽から逃げるよう、人々が忙しなく動いている。それは小寿林長屋のそばにある商店街でも同じだった。

その中の一軒、骨董屋「空金魚」。通りから活気ある売買の声が聞こえる中、そこだけは緩慢な時間が流れていた。風を通すよう大きく開かれた扉と窓は、陰を作るよう立てかけられた葦簀で隠されている。まるで客が来ようと来ま

いと構わないといった風情で。

ちりん、ちりん。時折思い出したように音をたてる風鈴。それがぶら下がっている格子窓の内縁に男が腰掛けている。女と見紛う細面に微笑を浮かべて。

「と、まあ、そんな感じでさ。櫛ってのは業の深いもんなんだよねえ。お前さんも大きくなって求婚された時はさ、永遠の愛を誓わせる勢いで高価な櫛を買ってもらったんだよ。お千代」

軽妙洒脱に語る男……空金魚の主、幽香は、朱色の薄い唇からゆるりと紫煙を吐く。

その足元にいる、格子柄の着物を纏った五歳の千代は、前のめりの正座で、林檎色の頬を軽く膨らませ、真剣に一点を見つめていた。

それは、座敷机に置かれている。大きさ三寸半。少し長めの月型。手にする部分の中央やや右寄りに管物の大菊が一輪。その下には枝に咲く可憐な小花が無数に散らばり、奥にハクセキレイが止まっている。それらすべて七色に輝く螺鈿と小さな真珠で作られた見事な細工物の黒鼈甲の櫛だ。

日の入らぬ部屋でも煌めくそれにすっかり目を奪われた千代は、金縛りにあったかのように動かない。



「きれい……」

幽香が額にかかる軽く波打つ濃灰色の髪をかき上げる。
下から得意げな顔が覗いた。

「だろう？ そいつは、今から二百年くらい前に作られた
花嫁道具の一つでさ。なんでも政略結婚だったそうさ」

「せいりやくけつこん？」

「当人同士の思惑を無視した結婚さ。好きでもない相手と
することもあるんだよ。金持ちとかだと珍しいことじゃない。
まあ、粋じゃあないよね」

珊瑚朱色の女物を粋に纏う瘦身の周囲をゆらりゆらりと
赤い金魚がたゆたう。その軌跡をなぞるよう幽香は手に
した銀の煙管を動かし、唇に挟んだ。

「桐箆笥やら布団やらの花嫁道具は、すべて婿側が揃えた
んだそうさ。櫛だけでこの意匠だ。さぞかし金のかかった
ことだろうよ。だけどな、そんなお宝もらっても花嫁は喜
ばなかったそうさ」

長い指が薄青の硝子徳利の首に添えられる。

「他に好いた男でもいたのかなんなのか。婿の揃えた物を
手にするのを拒否したまま、花嫁は結婚式前日に自害しち
まったんだと」

とぼとぼと。揃いの硝子猪口へ酒を注ぐ音に、ちりん
ちりん、風鈴の小さな音が重なる。

「婿の方は、それはそれは花嫁を気に入ってたらしくてね。
花嫁道具を見てると思い出して悲しくなるってんで、一切
合切売りに出した。すべて買い手がついて、それぞれの家
で代々大事に使われたり、壊れて廃棄されてんだけど……
その櫛だけは違った。次から次に短期間で持ち主が変わ
るんだ。で、骨董屋に流れ着いたってわけなんだよ」

冷たい酒を喉に滑らせ熱い息を一つつき、

「なんでそうなったかわかるかい？ お千代」

と、問う幽香には見向きもせず、櫛を凝視したまま千代
は口を開く。

「わかんない」

幽香は、んふふと笑い、火皿の残滓を灰吹きに落とした。
新たな葉をふんわりと詰め、燐寸を擦る。葉に火が付くの
を眺めながら答えを告げる。

「崇るのさ。その櫛にさわった者は必ず体調が悪くなるん
だと。それでみんな気味悪がつてねえ。さわるだけで崇る
なら髪に挿すなんてとんでもないってね。だから、誰にも
使われることなく持ち主が次々と……って、ちよ、お千代、
何してんだい!？」

ほんの少し、幽香が目を離れた隙だった。千代は『曰く
付きの櫛』を濃茶の髪に挿していた。白い耳の上で黒鼈甲



と螺鈿が輝いているのを見た幽香は、切れ長の金目を剥き、電光石火の早業で千代のおさげ髪から櫛を取る。

「ど、どどど、どうだい？ 気分は悪くないかい？ 駄力か、力が抜けるとか、熱が出てるとか……」

大慌てで千代の二の腕を掴み、薄い右掌を丸い額にびたりと押し当てた。

みーんみんみんみーん。どこかの壁にへばりついて鳴き始めた蟬の声がして、少し。

蒼白冷や汗の幽香に対し、きよんとした千代は小首を傾げた。

「どうしたの？ 幽香のおじちゃん」

異状のなさそうな千代の様子に、幽香は、はあああゝと長いため息をつきながら、ずるずると畳に突っ伏した。

「あたしに効かないのは、まあ……なんだけど、何故お千代も平気なんだろうねえ」

「この櫛、おかしいの？」

「すっごく気難しい付喪神になっちゃってんのさ。だから人を選ぶし、機嫌を損ねると厄災を喰らわせる。お前さん、気に入られたのかもしれないね。はー、なんもなくて良かった。でも、危ないからね。可愛いお千代に何かあったら、あたしがお前のおっかさんに殴られちゃう。はい。仕舞っちゃうよ」

きらきら煌めく黒櫛に髪がついていないか幽香は念入りに確認する。終わると上質の絹の布でくるみ、弁当箱ほどの黒い漆箱の底にそっと置いた。

「それ、どうするの？」

「明日、江戸城へ持っていくのさ。甲斐の大名からの依頼品でね。将軍様に献上するんだと。いいかい、お千代。この櫛はね、誰も挿したことがない曰く付きつてのもウリなんだ。だから、お前さんの髪に挿したことは、あたし達だけの秘密だよ」

「うん。ひみつ」

千代はきゅつと締めた唇を紅葉もみじの両掌で押さえた。愛らしい仕草の幼子の周囲を金魚がゆうらり巡る。

いい子だね、と言いながら、幽香は櫛を入れた箱の蓋をぱふんと閉めた。



序之二・連ナル端緒

甲斐の大名からの稀有な献上品は、將軍を喜ばせた。

ただ、それは表向きは、だ。

さわるだけで体調を崩す曰く付きのものなど好んでふれる者はいない。

だが、棄てるには黒鼈甲の櫛は美しすぎた。

結局、櫛は江戸城本丸から一番遠くの蔵の最奥の最奥に仕舞われた。

美しいのにふれることもできない——時折思い出しては、何やら惜しいような気がしていた將軍は、力ある術者に清めさせるよう家来に命じた。

三日後。術者の第一候補として、吉原のそばにある一輪寺の住職慈堂じけいが選ばれた……が、將軍は櫛どころではなくなってしまうた。

時に一八六五年八月十五日。英国艦隊イギリスを引き連れた薩摩代表が横濱港に現れ、幕府に鎖国解除を求めた為だ。

横濱だけでなく、長崎港、神戸港にも、英国艦隊及び英
国海賊まで入港したとの報告に、江戸城は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

神戸では、海賊船のそばに、ミルクティー色の髪の少女と黒髪の少年が乗る硝子の丸いティーポットのような球体の海豚いるかのような不思議な乗り物が浮いていたが、それは別の話として。

これを機に日本中で鎖国解除を求める反乱が勃発。帝が居住している京都も治安が悪化した。が、京都守護職である新撰組により小規模に抑えられた。

將軍や幕府はこれといった好手を打つことができぬまま、あれよあれよと一八六八年四月。とうとう、江戸城を明け渡すこととなった。

それからしばらくして。

將軍率いる幕府に変わり、各藩代表が主体となった政府が日本を統治することとなった。

政府は、江戸城を中央官庁の庁舎に利用するつもりだったが、無血開城以降、城内で爆発的に増えた異妖者ことものに翻弄され、思うようにはいかなくなってしまった。

議論の末、江戸城は異妖者退治の為に一時簡易封鎖されることとなった。

異妖者——それは、幽霊、魔物、付喪神、妖怪の類い。元々、江戸の頃から異妖者はあちこちに生息していたが、



爆発的に増えることは稀だった。

それらを退治できる者達はいにはいるが、如何せん相手の数が多すぎるうえに力あるものも混じっている。そして、対抗できる実力者の数は限られ、その者達だけで完全に退治しきれぬかも知れぬ数であった。

故に、江戸城の警備は外堀の周りのみ。しかも少人数。非常に手薄となっていた。

今なら簡単に江戸城に忍び込める——という噂があったという間に伝播すると、命知らずが現れた。

まずは、物見遊山目的の者。大抵が若い男で、酔っ払った勢いで見張りの目を盗んで橋を渡り、堀をよじ登り、そして……どうなったかわからない。

行方不明者を捜す為に忍び込んだ者もまた同じ道を辿った。

遊び半分の挑戦者が途絶えた頃、これ幸いにと動き出したのは窃盗目的の者達だ。

將軍家が江戸城から去った時、荷物が少なかったことは市井の噂となっていた。

——江戸城には將軍家の財宝がそのままにされている。栄華を極めた一族の財宝はどんな物か。いかほどの価値があるのか。それを盗めばどうなるか。

ある者は単独で。またある者達は集団で。伏魔殿となっ

た江戸城に忍び込み……そして、物見遊山の者達と同じく帰らぬままとなった。

その中の一人に、こそ泥の岩吉がんきちという者がいた。

この岩吉、何度も御番所ごばんしょに捕まっては釈放されを繰り返している常習犯。娑婆に出てすぐ一杯引つけた夜、早速仕事に取りかかることにしたのだ。

「けつ。何が異妖者だ。そんなモンが怖くて泥棒なんぞやってられなかったの」

と、不敵に嗤い、青髭が目立つ顎に指を添える。

岩吉は、他の不明者と同じく見張りの目をかいくぐり、持ち前の身軽さでさりと橋を渡り、ひよいと堀を越える。目指しているのは江戸城本丸ではなく、敷地の其処そこかしこ彼処にある数多の蔵。大口を叩いたが、やはり異妖者はおつかない。堀に近い蔵ならば、異妖者に狙われるようなことがあってもすぐに逃げ出せると踏んだわけだ。

そろりそろりと注意深く周囲を確認しながら、目についた蔵の前で足を止めた。先客がいたらしく扉の鍵は壊されている。大きな扉に手をかけると、キィと小さな音をたてなんなく開いた。

夜目の利く岩吉は、窓から入る月や星の明かりで中を探る。物が置かれている案配で、一番のお宝は最奥にあるだ



ろうと目星をつけ、高やかな棚と棚の間を足早に擦り抜ける。

一番奥に階段が見えた。音がしないよう注意深く登る。二階にもいくつも高い棚があった。

「へへっ。この辺りから選ぶとするか」

大きな物を運ぶのは難しい。できるだけ小さく金目の物はと物色していると、一番奥で無造作に置かれた弁当箱ほどの黒い漆箱に目が留まった。

「なんだなんだ？ 將軍様ってのは物を大事にしないのか、それとも置いた家来が雑なのか、どっちなんだ？ こんな値が張りそうな漆箱を木箱にも入れず置いとくなんてよお」

岩吉は箱を手に取り、そおと開いた。ほお、と息を漏らす。暗闇の中きらきらと光り輝いている、それは……

「ひゅー、黒鼈甲の櫛じゃねえか。管物の菊とハクセキレイの螺鈿細工に、真珠も使われてるな……こいつは値打ちもんだ。よし。これにすっか」

箱の中の絹布を引っ張り出し、丹念に櫛を包み込む。それを厳重に懷に入れた。

「おっし。異妖者にも見つからなかったことだし、獲物もいただいたし。帰るとすっか」

予想以上の釣果に岩吉は小さく口笛吹きつつ、蔵を出た。

「こいつはどうすっかな。質に入れるか、それとも裏専門の古物商に売るか……吉原にお気に入り遊女がいる旦那に手土産として売っちまうのもいいかな。江戸城から盗ってきたってだけでも値打モンだ。好事家の耳に入ったらもつと高値で売れるかしんねえ。へへっ」

後は少し先に見えている扉をひよいと越え、さらりと橋を渡れば完了……だった。

「あれ？ おかしいな……」

岩吉は手の甲で目を擦る。どれだけ足を動かしても扉に近づけない。それどころか、自分が歩いているかどうかもあやふやだ。そうこうしているうちに、何度も左右に傾げていた岩吉の首が右に傾いたまま動かなくなってしまった。どんなに力を込めても首は真っ直ぐにならない。

「お、おい。なんだこれ？ え、えええっ!!」

そこで初めて、岩吉は気づいた。足に絡まるねばねばしたものはなんだろう。動かす度に伸びるが、弾力をもって引っ張り戻される。肩や腕だけでなく首にも巻き付いていた。目には見えない……だが、確実に絡まれている。何かに捕縛されている。

それは岩吉の体をひよいと担ぎ上げた。

「へ、なな、なっ!! どこ連れてくんだ、おい、ひ、ひいいい!!」



情けない声をあげる岩吉のことなどお構いなしで、見えない何かが向かうのは——白亜の江戸城本丸。

そこへ向かう途中の、手入れがされず荒れ放題の中庭に、ちよろちよると動くものの気配が在った。歪な姿勢で宙に浮いた格好の岩吉は、目線だけそちらに動かす。猫ほどの大ききの鼠が見えた。息を呑む。鼠の背中に小さな蝙蝠の翼が生えていて、ぱたぱたと動いていたからだ。

「なななな、なんだありやあ！ ひよ、ひよつとして異妖者!？」

それが見えたのを皮切りに、ざわりざわり、あちこちに気配を感じるようになった。いる。ここには、江戸城には……無数の異妖者が棲んでいる。

「ひ、ひい、ひいいい、出たああ!!」

叫び、脅えているうちに、とうとう城内へと連れ込まれてしまった。大慌ての岩吉は縛めから逃れようとじたじた暴れるが、びくともしない。脂汗を垂らし、何が絡んでいるか確かめようと、おっかなびつくり再度見た。

本丸の遠くにいた時は見えなかったのに、城内では『見える』。

岩吉を縛めているのは、葛粉を湯で溶いたような、どろりとした不定形の異妖者だ。雄牛ほどある体軀はすべて自然薯のように固く弾力がある。胴らしき位置から伸びた太

く平たい触手が数本、岩吉の四肢や腰、首に絡みついている。それだけでは飽き足らぬのか、岩吉の背がずっぽりと埋まるよう胴に押しつけていた。岩吉のその様は、まるで蜘蛛の巣に捕縛された獲物のようだ。

「ひ、ひいい!!」

半透明の異妖者は床についている軀を蛞蝓なめくじのように波立たせ、長く幅広い畳廊下を器用に進んでいる。奥へ行くごとに喉に異様な乾きを感じ、岩吉は軽く咳いた。

「あ、こ、ここ……もしかして!？」

岩吉の推測通り、そこは松の廊下だった。目に眩しい若草色だった畳は三年の放置を経て黄色く斑に焼けている。手入れされぬ故の汚れや毛羽も目立つ。

「お、おとお！ 松の廊下だ！ す、すげえ！ ここであさのたぐみのかみ浅野内匠頭が……ん？」

廊下の上にごろごろと転がるものがある。岩吉の目が捉えたそれは、人間の骨。

「ひっ……!？」

角を曲がると人骨は益々増えた。

「なななな、なんだよ、これ！ それになんか軀がだるく……お、おい、待ってくれ。頼む、止まってくれ！」

岩吉の言葉などどこ吹く風と、転がる人骨が徐々に堆うすたか



くなつていく松の廊下を異妖者は進む。

「ひ、ひいい、ひい！」

奥に進めば進むほど、岩吉を襲う倦怠感はずれに変わってきた。

「なな、なんだ、これ……なん、だ？ がっ、がはっ、げほ、うぼっ！」

激しく咳き込んだ岩吉の口腔が鉄の味で一杯になる。荒れた畳廊下にぼたぼたと血が落ちた。

「なんで……俺、血吐いて……がはっ!? げほっ、うぼっ！」

吐血に注意を奪われた岩吉はまだ気づいていない。四肢の先が真っ黒に炭化しているのを。

「がっ、ひ、ひううっ、がっ、げほ！」

岩吉が強く咳く。炭化した四肢が揺れ、黒い滓がぼろぼろと畳に落ちる。

松の廊下が終わる頃、炭化はとうとう喉まで達した。口腔から零れる血は枯れ、涎を垂らすのみ。血が足りない為に視界がぼやける。それでもそこは岩吉を魅了した。

惜しみなく金が使われた襖絵の向こうに広がる大きな部屋。豪華絢爛な天井絵。精緻な細工の欄干。贅が尽くされたそこは、将軍が大名達を集わせる為の大広間だ。

そこには松の廊下以上に髑髏が転がっていた。大半は

端に堆く積まれているが、零れた骨が畳の上に散乱している。その上を異妖者が移動する。波打つ半透明に合わせ、ぱきり、ぱきりと骨の割れ折れる乾いた音が大広間に響く。

このまま自分も髑髏になつてしまうのだろうかと考えただけで、岩吉は怖くて怖くて仕方なかった。恐怖のせい、炭化の為か、瞬きすることのできぬ目が捉えたのは――大広間の最奥、一段高くなつた将軍が座す上座。

丸く盛り上がっている。蹲る人間の大人ほどの大きさのそれは動かない。夜に煌めいている。岩吉は目を瞠る。

座しているのは将軍ではなく財宝だ。

金で作られた象の置物。青花瓜草文盤の白磁の壺。銀と真珠で作られた簪。龍を象る翡翠。金の蒔絵で飾られた

漆塗りの食器。大きな赤珊瑚の香炉。十五尺を越える桃源郷を彷彿とさせる象牙細工。どれ一つとっても売れば一生

困らぬどころか、二代先の子孫まで生活に困らぬ高級品だ。欲しい、欲しい、欲しい。こそ泥には縁遠い逸品をいくつも目にした岩吉の欲が爆発する。

「は、ひはっ、は、はああ……！」

異妖者がそこに近づいているというのに、手を伸ばすことすらできず。岩吉は炭化しかかった喉から掠れた息を漏



らすのみ。

いよいよ、宝の山のそばまで運ばれた瞬間。

『何か』が岩吉の軀を一気に炭化させた。異妖者の半透明の触手の中には、僅かな黒い滓と、岩吉が纏っていた白地に細い青縞の着物に紺の角帯。そして、頭に被っていた古い手ぬぐいが残された。

そこで波打つのを止めた異妖者は、岩吉の残滓をゆつくりと畳の上に下ろす。

女の手のように細くした触手で薄汚れた着物の中を探る。目的の物をそつと取り出した。触手が掴んだものは、岩吉が蔵から失敬してきた櫛を包んだ絹布だ。

そろり、そろり。毀れ物を扱うよう、優しく摘まんだ布を恭しく開いていく。

黒鼈甲の櫛が現れると、喜びに半透明の全身を細かく波打たせた。

月光に煌めく黒鼈甲の櫛をそおつと触手の先に乗せ、ゆつくり慎重に宝の山の端に置く。

異妖者達にとって、上座から溢れる『何か』は、とても恐ろしく、とても惹かれる『もの』だった。供物のつもりなのだろうか。皆、畏敬の念を持って城中に散らばる宝物を挙ってここへ運びこむ。

櫛を供え終えると、半透明の異妖者は喜びに波打つ軀を畳に擦りつけ、ずずず、と前に後ろに揺らめいた。まるで人間のする五体投地のように。

ややあつて異妖者の波打ちに変化が訪れた。ゆつたりとした揺れから細かい痙攣へ。苦痛だ。人間はおろか異妖者さえ長く滞在が難しい『何か』に冒され、苦しみだしたのだ。

触手の先が炭化して、黒い滓がぼろりと落ちた。ピキーツと甲高い悲鳴をあげ、異妖者は大広間からそそくさと出て行った。

斯くして黒鼈甲の櫛は、そこに残された。

異妖者さえ逃げる『何か』が溢れる大広間の上座に……



一・純白ノ少年

江戸城無血開城から五年経ち、一八七二年七月。

右に艶やかなギヤマンのグラス、左に神々しい翡翠の鳳凰、その向こうには豪華な打ち掛け。紫檀の琵琶。大きな黄金の水盆。軽やかに鳴く墓場鳥の置物。等々——大広間の色褪せた畳の上に散乱する富の象徴達の中央に、白い人影が横たわっている。

年は十二か十三の少年だ。雪原のような純白の肌。すらりとした四肢。華奢な胴。それにふさわしい白鶴の首筋。それらの上をゆったりと波打つ純白の長髪。一糸纏わぬ姿でうつ伏せになり、左手で顎を支え、右手で戯作の頁を捲る。闇を吸ったような漆黒の瞳が追う文字は、遊女が男と別れを惜しむ言葉の羅列。

「人情本ですか。随分と艶っぽいものをお読みですね」
背後からかけられた声を無視し、少年は本から目を離さない。

少年の足元に立つのは、黒い洋装に袖のない白い前掛け……エプロンをつけた女だ。まとめた黒髪の上には小さな円形のヘッドドレス。所謂メイドと呼ばれる、洋館で下働

きをする女の衣装を纏っている。

無視は日常のようで、女は意に介さず、細縁眼鏡ほそふちめがねの下の美々しい貌を微笑で飾り、言葉が続けた。

「それは、下働きの者達の部屋から持ってこられたのですか？ 随分遠出されたんですね。あまり感心しませんが」
何を言われても少年は耳を貸す様子を見せない。

女はまったく気にならない様子で、しゃがみ、持っていた一抱えほどある籠を、純白の素足のそばに置いた。

「本日の捧げ物をこちらに置いておきます。気が向かれたらご確認ください」

優艶な手が籠の中身を畳の上へ置いていく。見る者すべてが溜息を漏らすだろう意匠の蒔絵の手鏡。華奢なつくりの琥珀鼈甲の扇。遙か昔に支那から届いた青磁の皿。精緻な細工が施された和時計。どれも独自に光を放つ見事な宝物だ。すべてを出し終えた女は、空の籠を抱え、すっと立ち上がる。

「それは『閨』と読むのですよ」
女はくすりと笑い、踵を返した。

不快に唇を歪めた少年は、ちつと短く舌打ちをする。硝子をはめ込んだような漆黒の瞳は、まさに『閨』が読めず止まっていたからだ。



「いつになったら、あいつの助けなしで全部読めるようになるんだよ。くそっ……」

悪態をつきながら、純白の少年は引つかかっていた場所から続きを読む。

賭場を預かる男は夜に女と会うことができず、昼にばかり郭に顔を出していた。

今日も昼に閨を共にし、日が朱に変わる頃、男は女の布団から出て身支度を調える。

素気無い背中にしなだれかかり、遊女は『三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい』と一つ唄い、短刀で左手小指の第一関節を切り落とす。懷紙に包まれた女の気持ち、男は受け取ることなく去っていく。女はただ悲しみに暮れ、そのまま衰弱して死んでしまった。

最後まで読み終えた少年は、本を閉じると緩慢に牀を起こし、胡座をかく。

「三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい……か」
別の下働きの男衆の部屋で拾った本で、それが都々逸であるを知っていた。

きよろきよろと辺りを見回す。あった。真つ赤な椿の描かれた掛け軸が放り出されている横に、剥き出しで置かれた紅木の三味線。手に取り、ぴんぴんと音を確かめ、撥を

握る。

三味線は捧げ物の一つ。教本は書庫から取って来た。本は絵付きであったが、何度読んでも良くわからず持てあましていたところ、付喪神と化していた三味線自身が色々と教えてくれた。今はもう、その声は聞こえなくなったが。

「三千世界の鴉を殺し、主と朝寝がしてみたい」
よく通る声で一つ唄って、撥を掴んだ手をだらりと垂らした。

「朝っぱらから喧しい鴉を殺して、貴方と朝寝がしてみたい、か……」

ぽつりと呟き、脳裏に浮かべる。

暑い夏の日。机の上に在った自分をじっと見つめていた大きく丸い瞳を。



二、銀座煉瓦街ニテ

とんとんとんとん……

小さな土間の台所から響く、茄子を刻む軽快な音。

横の座敷にいる、白地に太い縞模様の着物を纏った十三歳の千代は、それを耳にしながら、正座で畳に広げた錦絵新聞に目を通していた。

「帝都一の名探偵、勅使河原鶴吼お手柄。十二階で展示中の十カラットのダイヤ『人魚の涙』を狙った強盗をバリツで倒す……バリツって、英国の柔道みたいなものだったわけ、お母さん」

刻んだ茄子を湯気の立つ鍋に流し入れ、千代の母の奈海は、日本手拭いを巻いた頭を軽く傾げた。

「確かそうだったんじゃないかねえ。お前から聞いた話だと、珠沙華姐たまさかさんとこの居候の雨月うげつさんって人、バリツが使えるような雰囲気だねえ。用心棒なんだろう？」

今度は千代がおさげ頭を傾げる番となった。

「どうかなあ？ あの人、洋風のお店に行く時も着物のままだし。あ、でも、こないだ異人さんと、よくわからない言葉で喋ってた」

「へー。凄いやないか」

「でも、すぐ、なんだかいやらしいこと言ってからかうんだよ。そんな凄いや人に思えないよ」

「若いのに中身はおじさんなんだねえ。姐さん、そんな人でいいのかねえ」

「姐さんは気に入ってるし、大丈夫じゃないかな」

「そうだねえ。さあ、お昼ご飯できたよ。並べるの手伝っておくれ」

「はい。一太、二郎、三郎、文子ふみこ。ごはんだよー」

土間に降りて、玄関の引き戸を開ける。家の前で遊んでいる兄弟きょうだい妹達に声をかけた。はいいと元気な返事と共に、ごろんごろんと転がるよう三人の男児と一人の女兒が入ってくる。それに続いて、船頭の仕事を一段落させた父親の勇蔵ものつそりと入ってきた。

「おかえり、あんた」

「うーい、ただいまー」

暑い暑いと言いながら、勇蔵は絆天はんでんと草履を脱ぎ、一太が汲んだ水を美味しそうに飲み干した。

「千代。メシ食ったら惣治郎さんとこ行けるか？ 修繕が終わった茶碗を銀座の煉瓦街まで届けなきゃなんねえのに、腰痛が酷くて動けねえんだと」



千代は向かいの壁を見るとは無しに見る。そこには衣紋ひでりがみ掛けにかけた愛用の白い前掛けがぶら下がり、隣に魘おそ印しるしの名入れカレンダーが張ってあった。

「今日は姐さんと此行かない日だからいいよ。小父さんったら、また賭場で長っ尻したの？」

「らしいわ。いい感じに勝ってたんだと。駄賃ははずむつてたから、かまわねえ、ぼったくつてやんな。おつ、茄子の味噌汁とオクラと冷や奴か。いったただっきまーすつと」

○ ○ ○

父の言うとおりに駄賃をぼったくる要求はせず、千代は普通に惣治郎から駄賃と往復の鉄道馬車の運賃をもらい、銀座煉瓦街へとやって来た。

風呂敷に包んだ茶碗入り木箱をしっかりと両手で持ち、とん、と馬車から降りる。一気に容赦ない太陽の光が降り注いできた。

「あつゝい」

一声あげて、千代は左右を見回す。

高い木々とガス灯が立ち並ぶ歩道。道路には人を運ぶ馬車以外に荷馬車もせわしなく行き来している。土煙がたつ

往来を挟み向かい合って並ぶ洋風の建物は、大抵が三階建ての赤い煉瓦造り。

三年前、この辺りは大火ですべて焼失した。どうせ建て直すならと、政府は洋風の街造りに着手した。

愛蘭土アイランドから呼び寄せた建築技術者の手を借りて作った町並みは、英国イギリスは倫敦ロンドンを模したものとなった。

『赤煉瓦で造った建物に住むと青ぶくれになって死ぬ』という迷信のせいで、しばらく人が寄りつかなかったが、そのようなことを物ともせぬ強者達が住み始め、彼らに変調がないことが周知されてから、人が戻ってくるようになった。

千代が立ち止まっているのは異国の雑貨が並ぶ店の前。その横は最近、政治家の妻達が進んで着るようになったドレスの店。その隣は紳士物の燕尾服を誂える店。少し離れて新聞社の大きな看板が見える。その向かいの屋根に惣治郎から教えられた茶舗の看板があった。

「えっと、お届け先はあそこね」

通りを歩いているのは、和装や洋装、和装に洋装を取り入れた鶴スタイルと呼ばれる着こなしの大人達ばかりだ。その中にいると千代も大人の仲間入りをしたようで心がふわふわした。お使いといえど銀座に行くのだからと母に着せられた一張羅の水色の着物の裾が乱れぬよう、楚々と



歩きだす。

ふんわりと甘い香りが漂ってきた。元を辿ると、中央に桜の塩漬けが乗ったあんパンが店先に並んでいた。

「これが有名な銀座のあんパン……！」

今、帝都で一番流行のおやつを目の当たりにした感動に、千代は真剣に値札を凝視する。家族全員分を買うには財布の中身は足りないが、半分ずつならなんとかなる。お使いが終わったら買って帰ろうと決意し、道を急いだ。

依頼主である茶舗の店主に中身を確認してもらい、問題なしとの返事を受け、千代は再び灼熱の下の人となった。

「……暑い。ほんと暑い……」

うっかり猫背になりかかったが、千代の細の着物より通気性が悪そうなドレスを纏った女性達がしやんと背筋を伸ばしているのを見て、気持ちいを改める。

帰ったら裏庭で水浴びをしよう。もしかしたら、お母さんが西瓜を切ってくれるかもしれない。それを食べよう。と、できるだけ涼しくなるようなことを想像しながらパン屋へと向かう。

寄り道をせずに進んでいるつもりだが、商店の華やかな陳列窓につい心惹かれてしまう。時には足が止まってしま

う。

まずは味噌屋。綺麗に山型に盛られた味噌。たらいの水の中でひんやりと冷えた胡瓜。間にカメラ屋を挟んで洋食屋。その横からとんでんかんてん、大工仕事の音が聞こえてくる。かなり背が高くなりそうな建築途中の建物の奥に、千代の身長の上にはある大きな時計がちらりと見えた。ここは規模の大きな時計屋になるようだ。

建設の様子を眺めながら歩いていると、途切れ、外壁に設置された『白澤珈琲』と書かれた銅の看板と店内が見えた。

正方形の格子にはまる硝子の向こう、ソファの上で薄灰色のスラックスに包まれた長い足を組み、首をゆっくり左右に揺らしてカップに入った珈琲の香りを楽しんでいるのは、帝都一の名探偵、勅使河原鶴吼その人だ。

有名人を目の当たりにして、千代の目と足がびたと止まる。

「本物の勅使河原さん!? 初めて見た……！」

と、目をきらきらさせていると、名探偵の向かいに座る煉瓦色のキヤスケットを被った紅顔の美少年とぼつちり目が合った。不躰に人を凝視していたことに気づいた千代は、慌てて頭を下げ、珈琲店の前から走り去る。



「女の子みたいに綺麗な男の子……あの人、勅使河原さんの助手の双柳蘭月さんかな」

少し落ち着いてから足を止めたのは書道具店の前。表面に金色で花が描かれた高価そうな墨や真つ白な筆が、夏の日を受け輝いている。夢中になつて見ていたが、あんパンのことを思い出し、辺りを見回した。

「この辺りだったかな。向こうだったかな……」

探していると、右側からボロボロと馴染みのない音がした。遠くでキランと光を弾くのはフロントガラス。土煙と排気ガスを撒き散らしながら近づいてくるのは自動車だ。黒く丸い車体はカブトムシを想起させた。馬車よりも速くそれが通り過ぎるのを、千代はあんぐり口を開け見送った。「あれが自動車……初めて見た！ もの凄く速い……！」興奮の余韻の中にいた千代だが、『それ』に気づいて小さく首を傾げた。

真夏の太陽が照りつける中、山高帽と踵までの黒いインバネスのコートを纏った者が一人、向こう側の歩道を歩いている。洋装の者でも半袖である暑さだというのに、真冬の外套に毛織りの帽子を被っているのは明らかに異質だ。もう一つ異質なのは、周囲の者達が気に止めていないのだ。まるで見えてはいないかのように。

不思議に思った千代は目で追いつける。その者は真正面

より少し左にある和菓子屋と反物屋の間の路地に入ってしまった。

「こんなに暑いのにあんな格好でどこへ行くのかな……」千代は左右を見る。幸い、自動車も馬車も通っていない。小走りで道路を渡り切り、その路地の入り口に立つ。薄暗く狭かった。大人の男が一人で一杯になるくらい幅だ。左右の建物の窓が並ぶその向こう、小さく丸い生成り色の光が在った。その下に何かぶら下がっている。確かめようと、千代はそつと路地に入り込んだ。

ふうつと周囲が暗くなる。まるで夜の底に沈んだかのような錯覚を覚えた。

そこにしか光が存在しないかのように輝く丸い灯りの下で足を止めた。生成り色の光の正体は硝子洋燈だ。下にあったのは鉄製の小さな看板。一尺三寸ほどのそれにはカタカナで何か書いてある。

「カフェ・ラビュリントウス……？」

どういう意味だろうと千代が首を傾げていると、チリリンと音が聞こえた。扉をそちらに向ける。

洋燈の左側には石造りのアーチ型玄関があり、洋風の黒い格子扉が開いていた。内側の上端に飴色になった真鍮のベルがぶら下がっている。それが鳴ったのだ。

